

「東村山稲門会」は堅固な土台を

～ 継承への新たな期待 ～

東村山稲門会

第2代会長 山下 邦康



私の好きな言葉があります。

かつてアメリカの著名な政治家で彼が有名になる前に、地元で選挙民を前に演説した草稿です。東村山稲門会が設立十周年を迎えるこのとき、会員の皆様に私が贈りたい言葉でもあります。

「私たちが始めたことが完成できる保証はありません。後継者たちが私たちの努力を多とすかどうか分かりません。私たちが単なる言葉や計画だけで終わるとしたら、それらは簡単に無視されるでしょう。あとに残すのが地面の穴だらけなら、簡単に埋め戻されてしまうでしょう。

まだ私たちには時間があります。我々は目標に向かい、自分の存在を賭けて基礎に杭を打ち込み、堅固な土台を築き、コンクリートが固まるまで手入れをしなくてはなりません。そうすればあとに続く人たちはそれを無視することも、土台を崩すことも出来ないでしょう。後継者たちがその土台の上に何を築き、どんな新しい可能性を見出すかは、私たちが築いてきたこの土台がどれほど堅固なものにかかっているのです」

私は東村山稲門会の「現状と将来」を思うとき、この言葉を置き換えて考えることにしています。私たち世話役はもちろん、会員の皆様は今、まさにこの土台づくりに努めている最中です。

あとに続く後輩のためにも手を休めるわけにはいきません。将来この稲門会が担い、支えるどんな重い役割にも耐えられる土台を築いておく心構えが問われています。

私たちの稲門会は新しい時代を迎えます。「人心一新」の合言葉通り、さらなる希望の扉を目指したいものです。（昭36教育）

注

山下邦康氏は当会の設立に至る平成7年4月から約1年半にわたる設立準備会時から諸活動に関われ、平成15年11月から3年間は第2代会長の任を担われました。

会員のさらなる交流・親睦促進に資するよう、当会の年会報「東村山稲門会会報」の発行発起者であり、「誕生会」の生みの親でもあります。また設立10周年記念時には「東村山稲門会の歌」制定と、市民向けの「ボニージャックスと歌おう！」催事を主導されました。

健筆家で多くの著書を上梓されておられますが、現在は体調を崩されて筆を断たれております。「東村山稲門会会報 年報第10号」（設立10周年記念号 平成18年10月10日発行）に寄稿された山下邦康会長のあいさつ文を、編集委員がご本人のご快諾を得て、茲に転載いたしましたことをご了承ください。

東村山稲門会の回想とお願い

東村山稲門会
第3代会長 三宅 良太



当稲門会が設立25周年を迎えることは大変慶ばしく存じ、これまで継いでこられた役員皆様方のご尽力、会員各位のご協力にあらためて感謝申し上げます。

①**設立** 26年前、当時大学の奥島総長の日本全国各市に地域稲門会を造ろうとの意向を受け、当市にも稲門会を作る機運が持ち上がり、当時10人程の方が集まり、市役所勤務の水野要氏、市長選に出馬された上幸雄氏、大学総長室に勤務の井原徹氏、会社経営の山下邦康氏(第2代会長)、故大西幸夫氏(初代会長)、小生他有志が十数回協議しました。平成8年11月10日所沢キャンパスの校舎で設立総会を会員、家族、奥島総長他来賓を含めて約200人程の出席を得て盛大に挙行され、発足しました。

②**稲門会ニュースの発行、全会員に配布** 発足当初より各種会合のお知らせや会合出席報告、会員投稿の記事等を掲載し毎月発行することになり、そして全会員に配布することに決まりました。ニュースの編集、印刷については、故塩見之一氏、井垣和太氏、故中村真弓氏他にご尽力頂き現在も続いております。このことは全国でも珍しく、評価されています。配布については、経費のこともあり各町毎に手わけしポストパーソンのご支援をお願いしています。

③**各種同好会の発足** 小生は、藤澤博恭氏と相談し「園芸の会」を立ち上げ、主にスポーツセンターの部屋を借りて苗の交換等をし懇談致しました。この会は現在も続いております。次に「郷土史の会」もつくり、当初郷土史研究の手ほどきをふるさと歴史館の当時学芸員の小峰孝男氏に講話をお願いしたり、東村山出身の彫刻家池田宗弘氏にも絵画等作品をもちこみお話しして頂きました。「麻雀の会」は主に小野智氏、松永常尚氏等が世話人で随分賑やかに行われました。次に「旅行同好会」では小生が会長のおり、当市と姉妹都市の柏崎寺泊岬温泉へ行き、柏崎稲門会の水野紀一会長はじめ4名と郷里の滑川市に引越しされていた水野要氏等32名で大いに盛り上がり、日本海に沈む夕日を観賞致しました。先年突然亡くなられた重原真知子氏も音楽の会やウォーキングの会等に参加されておりました。ご冥福をお祈りします。

④**誕生会** 山下邦康氏の発案で当初は毎月久米川駅前の丸藤で、最初は幹事の當間昭治氏(第5代会長)等のお世話で賑やかに行われました。

⑤**設立10周年記念総会** 平成18年11月25日、ボニージャックス(西脇久夫氏他3名)に公演をお願いし中央公民館大ホールで478名の出席のもと大盛況で行いました。なお「東村山稲門会の歌」は西脇久夫氏の作曲です。

⑥**「東村山稲門会会報」の発行** 当初は年1回発行で故高鷲近氏、岡田一郎氏にお骨折り頂きました。

⑦**毎年恒例の行事** 新年会、花見会、納涼会、雑学講座、総会等が幹事世話人の方々のご奉仕で、楽しく賑やかに執り行われました。厚く御礼申し上げます。

思い出は尽きませんが、今後は現会長の山本岩男氏、副会長兼事務局長の町田光高氏他幹事の皆様方に運営をよろしくお願いし、これから何十年も東村山稲門会が活発に継続できるよう願ってやみません。

創立25年を振り返って

東村山稲門会
第5代会長 當間 昭治



私の東村山稲門会のスタートは、平成8年11月10日の設立総会への出席でした。当日小手指駅からバスで所沢キャンパスへ、そして午後1時からのキャンパスツアーに参加しました。公認の陸上競技場や野球場、そして我が国の大学では最高の施設と言われるアクアアリーナ（室内プール）、更に10万冊の蔵書を持つ図書館等、その立派さに驚きました。

総会での故大西会長の挨拶は、「人生80年の時代、定年後の20年を過ごす時、大部分の人達は地元で親しく話をする友人が居ない。それを打破する為にこの稲門会を大いに活用し、交遊の輪を広げてもらいたい。合わせて講演会活動を始めとしいろいろな分科会活動で会員同士の相互啓発を図り、一般市民も巻き込んで東村山市の文化向上にも貢献し、活気ある会にしていきたいと考えている」というものでした。総会後の懇親会で残念ながら参加者に知人のいなかった私は、帰りも一人で帰った事を昨日の様に思い出しました。

その後の稲門会との関わりは、平成10年5月30日に第1回を開催した「テニス同好会」でした。私の勤務先所有のテニスコートが新所沢にあり、無料で使えるという事で世話人を引き受けました。当日の参加者は、故江藤 三宅 山下 同夫人 當間 同夫人の6名、「特に際立った実力の持ち主もなく、ダブルスで2時間を楽しく過ごした」と第16号のニュースに投稿しました。その後テニスの会場は市営コートに移り、現在月4回1回に4時間という形で実施しており、隔世の感です。

60歳で定年退職（どんな事があっても60歳になったら地元密着の生活をしたいと思っていました）。時間的に余裕が出来た事もあり、誰からともなく「當間さんの庭で納涼会をしたい」という声に押され、結局計10回程実施しました。平成21年と22年は盛り上がりのピークの時で、参加者は早稲田祭の実行委員の学生や会員の家族、他稲門会の役員等含め、それぞれ64名と65名でした。（詳細はニュース第150号と第161号）

同時期に、お誕生会や雑学講座そして園芸の会といくつかのイベントの世話役をし、故小亀会長の下で副会長兼事務局長を経験させていただきました。私自身の稲門会での位置付けも強くなり、平成25年11月17日の第18回総会で第5代会長を拝命しました。当時の会員数は191名「東村山稲門会に入って良かった」と会員誰もが思えるアットホームな会を目ざし、「遠くの親戚より地元の稲門会 東村山稲門会でふれあいの輪を」というキャッチフレーズを掲げました。

現下のコロナの状況、生活様式は激変していますが、古くて新しい課題「会員同士の交流の活性化と新規会員の獲得」は待ったなしです。アフターコロナに向け、地道な活動を展開して、我が東村山稲門会の一層の発展を願うばかりです。

稲門祭の贈りもの

東村山稲門会

第6代会長 大内 一男



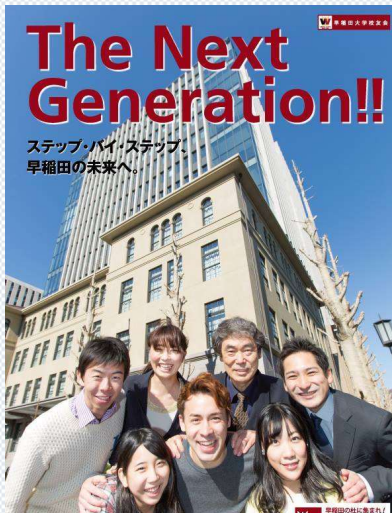
1996年11月10日に東村山稲門会が設立されてはや25周年、ご同慶の至りです。

私は創立時からのメンバーでしたが仕事が現役だった事もあり、たまに総会か懇親会に参加する程度であまり熱心な会員ではありませんでした。しかし会に対する思い入れが劇的に変わった年があるのです。2010年の早稲田大学校友会設立125周年の年の事です。当会が三多摩支部支部長を務める年度に当り稲門祭奨学金記念品販売本部副本部長を派遣しなければならず、当会幹事の末席に連なったばかりの私が否応なく派遣されたという事がありました。

記念の年という事で奨学金記念品についても例年にはない物をと、こだわりが求められていました。運よく世界屈指のオルゴールメーカー日本電産サンキョーの知人の協力を得る事が出来ました。そして日本の伝統技術、会津塗蒔絵職人の手仕事とオルゴールのトップブランドSankyoのコラボにより早稲田大学校歌付き「会津塗小物入れ」という記念品が誕生したのです。稲穂の葉の部分をも刀の刃のように表現した独創的デザインは大隈家料理方が独立し料亭を開いた折、大隈重信侯が寄贈したと伝わる会津八一記念博物館所蔵の「稲蒔絵重箱」に範を採ったもので、売れ行き好調で無事務めを果たせたのです。



この年、稲門祭に関わる過程で出自の異なる色々な稲門会の存在を知った事、運営に協力している才気溢れる多様な人材にめぐり逢った事、更には老若男女皆が早稲田を満喫しようとする姿勢と志に触れ、物の見方を大きく変えられたのです。お祭りや会の運営は中心に近い現場で壁を一つ一つ乗り越えてこそ喜びや感動を深く味わえるのだと教わりました。多分この時の出会いと経験がなければ私の東村山稲門会、校友会との深い関わりは無かったのではと思います。



それから6年間稲門祭でキャンパス庭園サービス本部本部長、企画広報本部などいくつかの部門で仕事をしました。自分がホームカミングデーの卒業後45年目の招待年度だった2015年にはなんと、私は稲門祭のポスター・パンフレットで年代別七名中の一人としてですがモデルデビューも果してしまったのです。

記念日に何故か縁がある私は2016年度の当会「創立20周年記念」の第21回総会で第6代会長に選任され2020年まで務めました。最初に取り組んだのが前年度から会の総力を上げ推進していた栄えある周年記念事業でした。それには多くの稲門会の応援がありました。総会当日の講師として著名な校友の瀬古利彦氏を、また当会が誇る市民雑学講座の第100回記念講演会には立ち見まであったドリアン助川氏を、稲門祭で培った人脈の効用により円滑に招聘出来たのです。同様にwebの専門的知識が無くても会員が作業出来るWord Pressを採用したホームページリニューアルもdigitalに詳しい校友が手助けしてくれたものです。

東村山稲門会は会員の高齢化、減少他数多くの難題を抱えています。価値観、情報環境等社会状況の変化にも向き合う必要があります。加えて新型コロナという未曾有の災禍が先行き不透明感を増しています。対応するためには当会だけで立ち向かうのではなく、近隣稲門会の皆さま始めオール校友の叡智の結集を図り取り組むことが出来た時、初めて光が見えてくるのではないかと考えています。